



# ブルーパーク 阿納

---

ブルーパーク阿納  
事務局長 岸本 昇  
令和8年1月22日



# 私たちが暮らす地区







**阿納地区の  
養殖場（全景）**



**若狭ふぐフルコース**



**漁家民宿（全景）**



- ・阿納地区では、以前から養殖業と兼業で民宿（漁家民宿）が営まれているが、民宿離れ、海水浴離れが進み、観光客が大幅に減少し、民宿の数もピーク時と比較すると大幅に減少した。
- ・小浜市は平成12年から「食」を核としたまちづくり「食のまちづくり」に取り組んでいた。
- ・阿納体験民宿組合は、養殖業を兼業している民宿があるという特徴を生かし、新たな集客を目的に、釣り体験や魚捌き体験といった、食に関する体験ができる施設として「ブルーパーク阿納」を開設した。

平成18年 小浜市阿納体験民宿組合を設立  
 平成19年 ブルーパーク阿納を整備  
 平成22年 リニューアル

## 当初の施設



## リニューアル







**当初施設  
パイプ造り、テント張り**



**リニューアル施設  
木造平屋建て（延床面積420㎡）  
収容人数 約132人  
事業費 49,586千円  
事業期間 平成20・21年度**



# 体験メニュー

## ①釣り



釣り堀



魚釣り講習



マダイ釣り



釣り上げたマダイ



# 体験メニュー

## ②魚さばき



活〆



魚さばき



魚さばき講習（当組合のメンバー）



魚さばき講習（民宿の女将）



# 体験メニュー

## ②魚さばき

### 工夫点

右利き用



左利き用



- ・各作業台の壁には、さばき方の手順がわかる紙芝居が設置されている。
- ・利き手が同じスタッフを各作業台に配置している。



# 体験メニュー

## ③バーベキュー



1. 鯛の刺身  
3. おにぎり

2. 鯛の塩焼き  
4. みそ汁



# 豊富な体験メニュー



釣り船体験



梅ジュースづくり



天然塩づくり



座禅



民宿の主との語らい



# シーカヤック体験





# 教育旅行の主な流れ（例）

## 1日目

13:30～ 入村式

シーカヤックや船釣り

各民宿で夕食、語ろう会

## 2日目

座禅

マダイ釣り体験

さばき体験

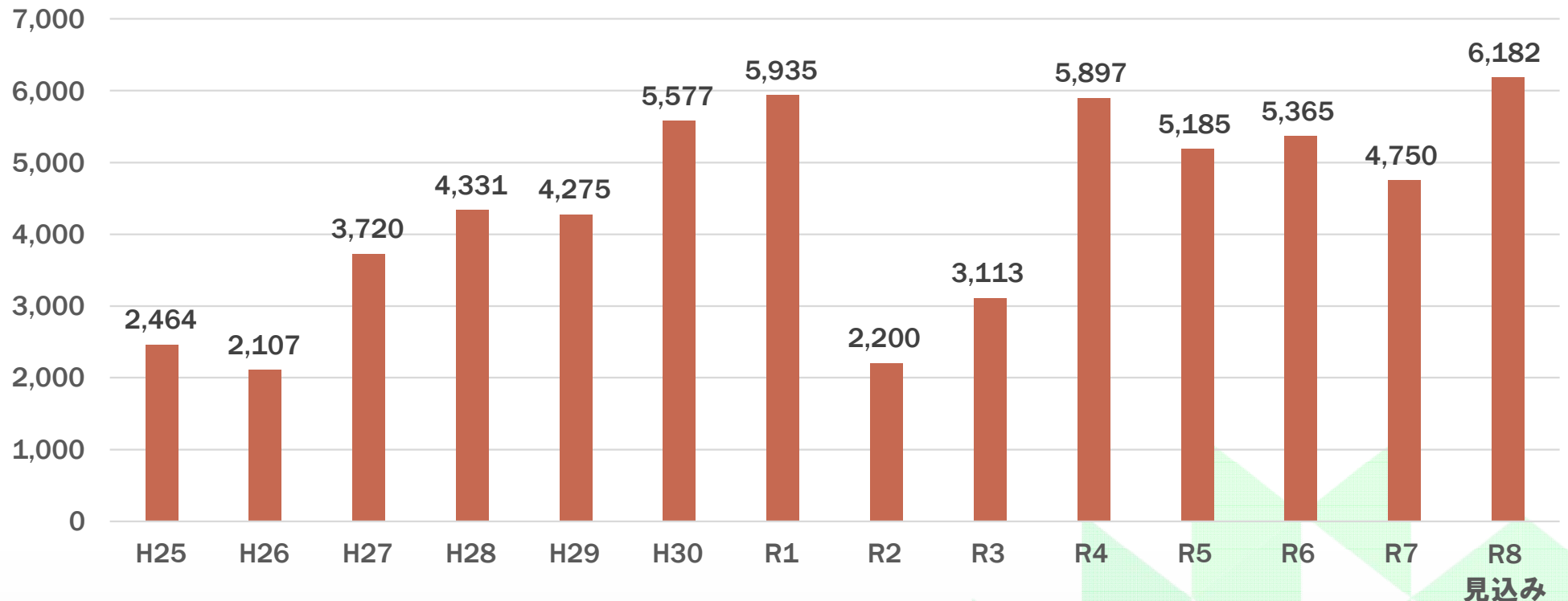
バーベキュー

12:00頃 終了





## ブルーパーク阿納利用者数（教育旅行のみ）



- ・開設1年目の利用者は教育旅行に関しては1校のみであった。開設当初は仮設の体験施設を使用していたこともあり、組合員の中でも「教育旅行を実施して良いのか」といった不安があった。
- ・そのような中、出向宣伝や施設を継続して利用してもらうために学校にお礼を兼ねて訪問し、問題点や要望などを細かに聞き取るなど、**満足度の向上を図る取組**を行った。
- ・その結果、年々利用者は増加し、近年は新型コロナウイルス感染症の影響もあり、利用者が減少したが、現在では年間5,000人以上が教育旅行に利用するまでとなった。
- ・最近では、利用学校の**90%が岐阜県**を中心とする中京圏になっている。  
（岐阜県、愛知県、東京都、大阪府など）



# 取組の評価



北陸農政局管内の特徴ある事例（～過去に選定された地区のフォローアップから～）

H28 北陸局選定  
H30 全国選定

地域一丸の漁家民泊で教育旅行の多様なニーズに対応  
④ 小浜市阿納体験民宿組合【福井県小浜市】

農泊

農林漁業・農山漁村文化体験

食育・教育

## 活動の概要

- 県内外の小中学生をターゲットとした教育旅行の受入を核として、週末限定で一般客の受入も開始。
- 若者や女性グループが中心となって、釣り堀、魚捌き体験、大自然の中でのシーカヤック体験を実施。
- 夕食後に宿の主人や女将、将来の後継者が参加して、漁師の仕事、漁村の暮らしぶりについて語り合う交流会を開催。



シーカヤック体験

平成25年度 福井県農林漁業賞  
平成29年度 オーライ！ニッポン大賞  
平成30年度 ふるさとづくり大賞 優秀賞  
平成30年度 ディスカバー農山漁村（むら）の宝にも選定etc・・・



# 今後の課題



- 従事者の高齢化
- 受け入れ態勢の確立
- 休日の設定（家業との連携）

**対応** → 福井県立大学生物資源学部生にスタッフ依頼  
福井県立若狭高等学校海洋科学科のインターンシップ受け入れ  
金土日の教育旅行 受け入れ中止  
（民宿客対応のため）





## マダイ釣り



## 魚さばき



## バーベキュー

・取組を通じて、子供たちに食の大切さと感謝の気持ちを学んでもらい、また、民宿の店主や女将とふれあい、自然とともに生きる漁師の暮らしや、生きる知恵、昔ながらに受け継がれた食文化などの話をきいてもらうことは、今後の漁村文化を繋ぐために大切なこと。

・近年では、このような取組が評価されて、県内外の市町から視察に来ていただいている。

このような評価は、

- ①別々の経営体である各民宿が協働した
  - ②阿納地区には民宿の後継者がいた
  - ③市が「食のまちづくり」として食育に重点的に取り組んでいた
  - ④地域の特色や漁港施設をはじめとした既存の地域資源を有効活用した
- 結果である。

- ・このような地域資源は全国各地にある。
- ・小浜市内においても、阿納地区以外に複数の漁村が存在している。
- ・このような事例を横展開していくために、地域資源の掘り起こしや漁村の振興に関わる人と連携できる体制づくりが重要。



**ご清聴、有難うございました。**

